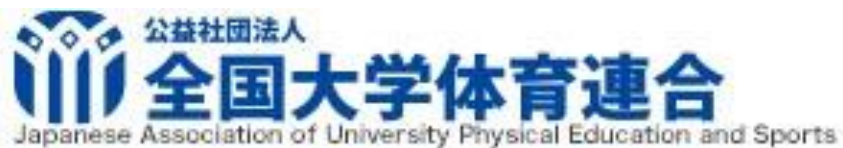


# 発表プログラム・抄録集



The 12th Research Forum of Physical Education and Sports for Higher Education, 2024

## 第12回大学体育スポーツ研究フォーラム

会期:2024年2月28日(水)

Zoomによるオンライン開催



# 第12回大学体育スポーツ研究フォーラム

## 目 次

目次	1
主催，期日，形式，実施内容	2
運営委員会・実行委員会組織	3
大体連常務理事／研究部長，運営委員長，実行委員長挨拶	4
フォーラム日程	6
参加者へのお知らせ	7
発表者へのお知らせ	8
大学体育優秀論文賞受賞講演	9
中四国支部主催企画	13
一般発表プログラム	16
一般発表抄録（研究報告・事例報告）	17
「大学体育スポーツ学研究」投稿規定	23
「大学体育スポーツ学研究」投稿時チェックリスト	26

## 主催，期日，形式，実施内容

### 【主 催】

公益社団法人全国大学体育連合（大体連）

### 【期 日】

2024年2月28日（水）9：55～17：10

### 【形 式】

Zoomによるオンライン開催

### 【実施内容】

- ・ 大学体育優秀論文賞受賞講演
- ・ 中四国支部主催企画
- ・ 一般発表「大学体育スポーツに関する研究報告・事例報告」

## 運営委員会・実行委員会組織

### **【運営委員会組織】**

全国大学体育連合常務理事／研究部長 木内 敦詞（筑波大学）

#### 運営委員

委員長 田原 亮二（西南学院大学）

副委員長 中山 正剛（スポーツ庁）

委員 藤野 和樹（千葉商科大学）

委員 梶田 和宏（京都先端科学大学）

#### 実行委員

委員長 高戸 仁郎（岡山県立大学）

副委員長 西村 次郎（岡山理科大学）

幹事 綾部 誠也（岡山県立大学）

委員 飯田 智行，森村 和浩（就実大学）

榎本 翔太，鈴木 久雄（岡山大学）

菊川 顕（岡山商科大学）

東恩納 玲代（周南公立大学）

前川 真姫（環太平洋大学）

## 大体連常務理事／研究部長，運営委員長，実行委員長挨拶

全国大学体育連合 常務理事／研究部長

木内 敦詞（筑波大学・教授）



中四国支部のご協力のもと，第 12 回目の本フォーラムを開催できることを，心より嬉しく思います．支部長の高戸仁郎先生をはじめ，中四国支部の先生方のご協力に厚くお礼申し上げます．大学体育教員のFDを支える学術活動の両輪として，本フォーラムは論文誌「大学体育スポーツ学研究」とともに重要な役割を果たしています．昨年創設の優秀論文賞受賞公演は今回，第 20 巻掲載論文から選出された 2 編の論文著者にご講演いただきます．いずれの研究も，大学体育スポーツを舞台にした高い学術性と実践性を兼ね備えたものとして評価されたものです．本フォーラム発表演題が論文となり，優秀論文賞に選出されることを，今から楽しみにしています．

全国大学体育連合 研究部副部長（大学体育スポーツ研究フォーラム運営委員長）

田原 亮二（西南学院大学・准教授）



第 12 回大学体育スポーツ研究フォーラムは，中四国支部のみなさまのご協力を得ての開催となります．多数の先生を束ねていただいた高戸仁郎先生に厚く御礼申し上げます．今回，午前中のセッションで「アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開」をご講演いただく岡山大学の鈴木久雄先生は 4 年前に新型コロナが大流行し，我々大学体育教員が今後の授業をどうするかでパニックになっていた際に，会員向けに全ての教材をご提供いただいた先生として記憶されている方も多いかもかもしれません．コロナによる危機を予見していたということは無いと思いますが，世の中の変化に対応し e-Learning を利用した学習環境を整えていたことによって，多くの大学教員そして大学体育を学ぶ学生たちが救われたと言えるでしょう．世の中の変化はとどまることなく，生成 AI の汎用化に伴い，我々の生活にもパラダイムシフトが起こると言われています．大学体育の本質について考え，来るべき大学体育の未来に備えるための機会としてこのフォーラムが役割を果たせば幸いです．

第12回大学体育スポーツ研究フォーラム実行委員長  
高戸 仁郎（岡山県立大学・教授）



第12回大学体育スポーツ研究フォーラムを中四国支部で開催できますことを大変光栄に存じます。

2019年12月から始まったコロナ禍も、2023年5月に新型コロナウイルスが感染症法上5類になったことに伴い一旦の区切りを付け、大学教育は以前の状態に戻りつつあります。その間、大学体育・スポーツ教育は多くの制限を受けながらも、創意工夫によってこの難局を乗り越えてきました。企業には約20年前から事業継続計画（BCP：Business Continuity Plan）を作成することが推奨され、災害や事故で被害を受けても、可能な限り短い期間で事業を再開できるように備えがありましたが、いよいよ今年4月には介護事業者も策定することが義務づけられることとなりました。

大学体育スポーツ（大学教育）も、災害や事故等で学生の学びを止めることなく、教育効果を保証したうえで可能な限り早期に教育を再開することが求められます。今回のフォーラムでは、優秀論文賞受賞講演の他に、講演「アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開」、研究報告・事例報告等を予定しております。ぜひ多数の皆様にご参加いただき、コロナ禍で一気に加速したDX化の流れに乗り、今後の体育スポーツ教育を展望する機会となれば幸いです。

## フォーラム日程

期日：2024年2月28日（水）9：55～17：10

形式：Zoomによるオンライン開催

2月28日（月）

時 間	プログラム
9:55～10:00	諸注意，事前説明 運営副委員長 中山 正剛（スポーツ庁）
10:00～10:10	開会式・挨拶 運営委員長 田原 亮二（西南学院大学） 実行委員長 高戸 仁郎（岡山県立大学）
10:10～11:10	大学体育優秀論文賞受賞講演 講師：諏訪部 和也（流通経済大学） 講師：藤田 恵理（東京女子大学）
11:20～12:30	中四国支部主催企画 『アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開 —身体活動増進プログラムのすすめ—』 講師：鈴木 久雄（岡山大学） 司会：綾部 誠也（岡山県立大学）
12:30～13:30	昼休憩
13:30～17:00	一般発表：9 演題（研究報告 5 演題，事例報告 4 演題） 発表時間：1 演題 20 分（発表 15 分，質疑応答 5 分）
13:30～14:30	研究 1-3 座長：東恩納 玲代（周南公立大学）
14:45～15:45	研究 4-5・事例 1 座長：榎本 翔太（岡山大学）
16:00～17:00	事例 2-4 座長：前川 真姫（環太平洋大学）
17:00～17:10	閉会式

## 参加者へのお知らせ

### 1. 参加方法

参加申し込みをしていただいた方に Zoom の URL および発表プログラム・抄録集を送信いたします。なお、発表プログラム・抄録集は2月26日（月）配信予定です。

### 2. 参加費

参加費は以下のようになっております。

#### 発表あり（筆頭発表者のみ）

機関会員・個人会員・大学院生：1,000 円（機関会員かつ個人会員は無料）

非会員：3,000 円

#### 発表なし（共同発表者含む）

機関会員・個人会員・大学院生：無料

非会員：3,000 円

【振込先】 納入先にご注意ください。

#### 大体連

常陽銀行 0130

研究学園都市支店 104 普 3976640 公益社団法人全国大学体育連合研究部

## 発表者へのお知らせ

### 研究報告・事例報告

1. 1演題につき、**発表 15分、質疑応答 5分の計 20分間**です。**15分**に発表終了の合図をいたしますので、**ご自身で時間の管理**をお願いします（途中の合図はございません）。
2. もし、発表時に回線トラブルが発生してしまった場合でも、**時間通りに進めさせていただけます**。回線速度がより安定している場所での接続をお願いいたします。
3. 発表者は「画面共有」機能で発表スライドを表示してください。また、質疑応答の終了後には、「画面共有」の停止を忘れないようにしてください。
4. 質疑応答で対応できなかった質問については、個人チャット等で対応していただけるとありがたいです。
5. 事前に参加者に配布する資料（データ）がありましたら、前日の**2月27日（火）17:00****まで**にご提出をお願いいたします（**12th.forum.2024@gmail.com**）。こちらから参加者に一斉送信をいたします。

発表に関して不明な点は、お気軽にお問い合わせください。お問い合わせ先は、担当の**田原亮二・中**

**山正剛(12th.forum.2024@gmail.com)**まで。

## 受賞講演

### 『大学体育優秀論文賞受賞講演』 「大学体育スポーツ学研究（第20巻）」優秀論文賞

2月28日（水）10:10～11:10

《タイトル・演者》

大学体育授業が受講生のメンタルヘルスに与える急性及び慢性効果：  
エアロビックダンスと器械運動の比較

諏訪部 和也（流通経済大学）

原著 

大学体育スポーツ学研究 20-1-11  
©2023 全国大学体育連合 <https://dataken.or.jp/>

## 大学体育授業が受講生のメンタルヘルス に与える急性及び慢性効果： エアロビックダンスと器械運動の比較

諏訪部和也<sup>1</sup>、生田目颯<sup>2</sup>、田中 光<sup>1</sup>、  
林田はるみ<sup>3</sup>、伊藤理香<sup>4,5</sup>、大槻 毅<sup>1</sup>

<sup>1</sup>流通経済大学スポーツ健康科学部、<sup>2</sup>筑波大学大学院人間総合科学研究群、  
<sup>3</sup>桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部、<sup>4</sup>豊橋創造大学大学院健康科学研究科、  
<sup>5</sup>常葉大学健康プロデュース学部

### 要 旨

体育授業は大学生のメンタルヘルスに好影響をもたらすことが期待されるが、運動種目による違いはほとんど検討されていない。また、急性及び慢性的な影響を包括的に検討した報告はない。本研究は、異なる種目（エアロビックダンス及び器械運動）の体育実技が気分を与える急性及び慢性効果を検討した。健康・スポーツ科学を専門とする学部学生（エアロビックダンス40名、器械運動34名）を対象に、毎授業前後に二次元気分尺度（TDMS）、学期前後に気分プロフィール検査（POMS）を測定した。典型的な授業内容の授業において、心拍数及び主観的運動強度（RPE）を測定した。TDMSの結果から、単回授業前後では活性化、快適度、覚醒度が両種目で増大したが、活性化、快適度では増大の程度がエアロビックダンスの方が大きかった。安定度はエアロビックダンスで増大、器械運動で減少した。一方、学期前後の測定では、POMSのネガティブな気分がエアロビックダンスのみで減少した。単回授業後の安定度の増大と学期後のネガティブな気分の減少の間には有意な相関関係があり、エアロビックダンスの慢性的効果の背景に、急性的效果が関与する可能性が示唆された。以上の結果から、大学体育がメンタルヘルスに及ぼす影響には運動種目による違いがあり、エアロビックダンスはメンタルヘルスに対して急性及び慢性的に好影響を与えることが示唆された。心拍数及びRPEから測定した運動強度は両種目で同等であったことから、種目間で認められた気分に対する効果の違いは、他者とのコミュニケーションや音楽などの環境要因に起因する可能性が考えられた。

### キーワード

大学体育、二次元気分尺度、気分プロフィール検査、心拍数、主観的運動強度

責任著者：諏訪部和也 Email: [kusuwabes@rku.ac.jp](mailto:kusuwabes@rku.ac.jp)

《タイトル・演者》

大学体育におけるこころの準備運動としての「笑い準備運動」の教育効果

藤田 恵理（東京女子大学）

原著



大学体育スポーツ学研究, 20, 33-47.  
©2023 全国大学体育連合: <https://datahonor.jp/>

## 大学体育におけるこころの準備運動 としての「笑い準備運動」の教育効果

藤田恵理<sup>1</sup>, 平工志穂<sup>1</sup>, 田中幸夫<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東京女子大学現代教養学部, <sup>2</sup>東京農工大学工学部

### 要 旨

本研究の目的は、大学体育におけるこころの準備運動としての「笑い準備運動」が大学体育授業の教育効果に与える影響について、体育授業の主観的恩恵評価やコミュニケーション能力の観点から検証することである。2021年10月～12月に大学体育実技授業内で介入調査を行った。授業開始時に通常の準備運動に加えて「笑い準備運動」を実施する授業（介入群）と通常の準備運動を行う授業（対照群）を設定した。両群ともに同一の内容からなる体育実技授業を実施し、「笑い準備運動」が与える影響について気分・感情評価（POMS2短縮版）、コミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）、初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度（PBS-FYPE）を用いて検討を行った。その結果、「笑い準備運動」を実施した介入群の体育実技後のPOMS2の気分・感情変化は対照群に比べてより大きな改善効果がみられた。ENDCOREsでは、介入群で「表現力」、「関係調整」の2尺度が対照群と比べて有意に改善し、コミュニケーション・スキルの向上が示された。PBS-FYPE 下位尺度において、「笑い準備運動」実施の有無による有意な差は見られなかった。大学体育実技での「笑い準備運動」は、コミュニケーション・スキルの向上といった大学体育授業の教育効果を高めることが示唆された。大学体育において「笑い準備運動」をこころの準備運動として活用することは、気分状態の改善やコミュニケーション・スキル向上へのアプローチとして期待できる。

### キーワード

気分プロフィール検査（POMS2）、コミュニケーション・スキル、ENDCOREs、初年次体育授業の主観的恩恵尺度（PBS-FYPE）

責任著者：藤田恵理 Email: [fujita@lab.twcu.ac.jp](mailto:fujita@lab.twcu.ac.jp)

## 「大学体育スポーツ学研究（第20巻）」優秀論文賞 選考経過および講評

### I. 選考経過

#### 1. 選考対象となる論文

2023年3月発刊の「大学体育スポーツ学研究（第20巻）」に掲載された10編のうち、過去の本賞筆頭受賞者（西脇雅人氏）による筆頭論文1編、および本賞審査辞退者（難波秀行氏）による筆頭論文1編の計2編を除く8編（原著3編，研究ノート5編）の論文を選考対象とした。

#### 2. 選考委員（敬称略）

第1次選考委員：西田順一，難波秀行，園部豊，木内敦詞，梶田和宏，小林雄志，佐藤和，高田大輔，田原亮二，中田征克，西垣景太，平工志穂，藤野和樹，山本浩二（以上，本誌編集委員）

第2次選考委員：木内敦詞（委員長），西田順一（幹事），荒井弘和，磯貝浩久，寺岡英晋，宮口和義

#### 3. 選考結果

第1次選考では，本誌編集委員全員より優秀論文賞に相応しい2編の推薦がなされた。選考委員は自身が共著者の論文以外の上位2編を推薦することとした。その結果，推薦数の多かった上位2編を第2次選考の対象とした。第2次選考では選考委員が2編に対して量的・質的評定を行った。その結果に基づき，最終的に以下2編を受賞論文として本連合常務理事会へ上申し，承認された。

第20巻においては，2編の論文を優秀論文賞に選出した。過去に「該当論文なし」の年度はあったが，2編選出は初めてのことである。本誌に優れた掲載論文が集積している証左といえる。

#### 受賞論文名（掲載順）

大学体育授業が受講生のメンタルヘルスに与える急性及び慢性効果：

エアロビックダンスと器械運動の比較

著者：諏訪部和也，生田目颯，田中光，林田はるみ，伊藤理香，大槻毅

掲載：大学体育スポーツ学研究，20：1-11，2023年3月

大学体育におけるこころの準備運動としての「笑い準備運動」の教育効果

著者：藤田恵理，平工志穂，田中幸夫

掲載：大学体育スポーツ学研究，20：33-47，2023年3月

## II. 講評

### <諏訪部論文>

諏訪部論文は、エアロビックダンスと器械運動の体育実技が大学生のメンタルヘルスに与える急性および慢性的な効果を検討したものである。体育授業は大学生のメンタルヘルスに好影響をもたらすことが期待されているものの、運動種目による効果の差については十分に検討されていないこと、とりわけ音楽と他者とのコミュニケーションの持つ意義を、厳密な研究プロトコルのもと、急性および慢性的の視点から包括的に検証した点を評価できる。また、先行研究の課題を的確に指摘したうえで具体的な実践を見据えているので、方法の記述が具体的かつ詳細であり、考察もさまざまな角度から述べられている。そのため、後進の研究者が教育実践研究の論文化に挑むときの模範となる論文といえる。

1) 気分をネガティブな側面だけでなくポジティブな側面に着目することでより一層効果を検出できた可能性や、2) サンプルサイズの増加と長期的なフォローアップが望まれること、3) より詳細な環境要因に関する検討、が課題として残されるものの、優秀論文賞に相応しい論文と判断した。

### <藤田論文>

藤田論文は、近年の大学生のコミュニケーション能力の未熟さを背景に、大学体育授業における「笑い準備運動」が教育効果に与える影響を検証したものである。本研究の結果は、こころの準備運動としての「笑い準備運動」が大学生の体育授業後の気分や感情に肯定的な影響を与え、コミュニケーションスキル向上へ寄与する可能性を示唆している。体育授業をより円滑に、そして活発に進めるための実践的な工夫としての「笑い準備運動」導入のアイデアは圧倒的なオリジナリティを有しており、著者らの挑戦的な姿勢は高く評価できる。また、笑うことの重要性を学術的および実践的な両側面から考察を加えていることも優れた点といえる。

その一方で、さらなる研究課題の残ることが審査員からも指摘されている。1) 学修者のコミュニケーションスキルの質や量を評価できていないこと、2) 気分の指標がネガティブな側面に偏り、ポジティブな側面を評価できていないこと、3) 準備運動にとどまらず、その後の授業の中で笑いを誘発する仕組みへの展開がなされていたかどうかの記述が不足していること、などである。

これらの課題は残るものの、コミュニケーション能力向上をはじめとした体育での学びを球技以外の種目でもより効果的に行う新たなアプローチを提案するユニークで応用可能性の高い試みは、大学体育の発展に寄与する価値ある研究として位置づけられる。よって、優秀論文賞に相応しい論文と判断した。

以上

中四国支部主催企画

『アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開  
—身体活動増進プログラムのすすめ—』

2月28日（水）11:20～12:30

《演 者》 鈴木 久雄（岡山大学）

司 会：綾部 誠也（岡山県立大学）

## 【背景】

Kohlら（2012）はLancetに「身体活動不足はパンデミック」と題した論文を発表している。同年に発表された日本の身体活動不足者割合は男性が58.9%、女性は61.6%であり（Hallal PC, 2012），我が国は世界で最も身体活動不足者が多い国の一つである。日本・厚生省は2022年10月に健康日本21（第二次）最終評価を公表し、歩数の増加目標についてやや減少傾向はあるものの、変わらないと評価した。そして、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023」を発表している。これまでの身体活動が週23メッツ時（運動を週4メッツ時）の推奨に、筋力トレーニング週2～3日、座位行動時間を長すぎないように注意することが加わった。

我が国の新型コロナウイルス感染者数は2023年5月までに約3400万人であり、死亡者数は約7万5000人であった。コロナ以前に比べコロナ禍の身体活動量について、Nevilleら（2022）は28%減少、Strainら（2022）は30%減少とし、日本の大学生では50%弱の減少が報告されている（東恩納ら2022, 森山ら2021, 西山2021）。アフターコロナにおいては、データがないが回復したと考えにくい。また、コロナ禍では抑うつ症状等のメンタルヘルスに関連した問題を提起する論文が多い。Nomuraら（2022）はコロナ発症期と1年後に大学生の抑うつ症状を調査し、中等度の抑うつ症状が11%から17%に、自殺懸念症状は5.8%から11.8%に増加し、学生の心理的苦痛を和らげる緊急介入が必要であるとしている。うつや不安の症状の軽減には身体活動が効果的であることはWHOも認めており、アフターコロナの大学体育・スポーツ授業においては低強度から中強度の身体活動に関する教育を加える必要があると考える。

岡山大学の「するスポーツ演習」では、スポーツ実技に加え身体活動増進プログラムの作成・実践・記録を行っている。その基本的考えと教材を紹介し、アフターコロナの大学体育・スポーツ授業を考察する。

## 【身体活動増進プログラム】

森田ら（2016）が大学体育の理念として抽出したキーワードは健康、体力、思考／知識、生涯スポーツ、こころ、セルフマネジメントなどであり、大学体育・スポーツ授業には実技のみの授業や実技と講義を合わせた授業、演習形式の授業、そして全学必修の大学、選択のみの大学と様々な授業形態である。Shengyuら（2020）はメンタルヘルス改善に効果的といえる運動・スポーツ種目は太極拳、ヨガ、ダンスと報告している。それほど多くの研究は報告されていないが、今後、大学体育・スポーツ授業のスポーツ実技種目にはメンタルヘルスを含めた分類や強度評価等の検討が必要かも知れない。

岡山大学におけるスポーツ教育は生涯にわたるスポーツ実践力と健康づくり実践力の育成をかね、 「するスポーツ演習」ではスポーツ実技でスポーツ実践力を、そして身体活動増進プログラム実践で健康づくり実践力を育成しようと考えている。身体活動増進プログラムは授業外でのe-Learningを用いた自学自習とした。教材としては、身体活動プログラム作成のための理論解説書、筋力トレーニングと静的ストレッチングのイラスト集、

身体活動プログラム3種類の基準を含めた詳細説明書，理論学習小テスト，身体活動プログラム記入例・チェックリスト，記録ノートパッケージした。

この身体活動増進プログラムの目標は身体活動実践の継続，つまり習慣化にあり，このことが「健康づくり実践力」と位置づけている．そのためには身体活動の重要性を知り，自らプログラミングとセルフコントロールをすることとしている．そのため，行動変容を促す方法も掲載している．例えば，2日続けて実践できないときはプログラムを変更すること，やる気が起きないときはストレッチだけにする，あるいは筋トレは実施しないこととするなどを前提に，筋トレに適した音楽を聴きながら，YouTubeを視聴しながらストレッチ，親に「やれ」と言ってもらうなども有効な継続方法として紹介している．

この授業を介入研究（コロナ以前）として実施した結果では，中強度身体活動が介入1年後まで高い値を示した（図1）．筋力トレーニング，ストレッチングは介入直後に高い実施率を示したが，1年後には初期値に戻った．授業期間には身体活動，筋力トレーニング，ストレッチングの増加がみられたことは成果であった（大学体育スポーツ学研究2024.3掲載予定）．

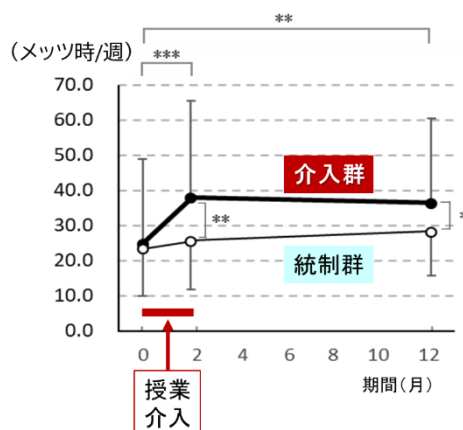


図1 身体活動増進プログラムの介入効果

コロナ禍でのオンライン授業期間に19大学でを使用した身体活動増進プログラムの調査結果では，授業前より授業後に体力が増加した・やや増加したと答えた学生は70%，身体活動増進プログラムの習慣化は72%，理論学習の難易度はふつうと答えた学生が74%，総合評価はよい・ややよいと答えた学生が70%であった．また，e-Learningに加え，双方向のメディア授業に高めた授業方法ではさらに高い習慣化と高い評価を得ている．

### 【まとめ】

アフターコロナの大学体育・スポーツ授業の展開として，これまでのスポーツ実技に加えて，e-Learning等を活用した身体活動を増加するための教育を提案させていただく．

## 一般発表プログラム

【日程】2月28日(水) 13:30~17:00

【内容】9演題(研究報告5演題, 事例報告4演題)

【時間】発表15分, 質疑応答5分, 計20分間

【第1セッション】13:30~14:30 座長: 東恩納 玲代(周南公立大学)

研究-1	13:30~13:50	大学体育のAL型授業による効果に関する一考察: 剣道に着目して
	○高瀬武志(桐蔭横浜大学)	
研究-2	13:50~14:10	STEAMS教育としての大学体育の提案: 融合的な学びの捉え方から生まれる大学体育の新展開
	○北村勝朗(日本大学)	
研究-3	14:10~14:30	大学体育授業時間外の日常身体活動促進の実態: 文献調査および質問紙調査から
	○松浦稜(筑波大学大学院), 木内敦詞(筑波大学), 加畑碧(筑波大学大学院)	

【第2セッション】14:45~15:45 座長: 榎本 翔太(岡山大学)

研究-4	14:45~15:05	学生アスリートにおけるライフスキルの価値: 大学柔道部員を対象とした一般性自己効力感への影響性の検討
	○藤島将太, 西田順一(近畿大学)	
研究-5	15:05~15:25	異なる種目の一過性運動による心理的效果: 大学体育授業におけるヨガとエアロビックダンスの比較
	○渡辺久美(桜美林大学), 中村好男(早稲田大学)	
事例-1	15:25~15:45	米国における大学体育・スポーツの取り組み事例: 大学体育発祥の地であるアマースト大学とマサチューセッツ工科大学の現地調査
	○難波秀行(日本大学), 中田賢一(兵庫大学附属総合研究所)	

【第3セッション】16:00~17:00 座長: 前川 真姫(環太平洋大学)

事例-2	16:00~16:20	大学体育授業におけるアダプテッドスポーツ実践事例研究: 実践からみえてくる限界と課題
	○山本浩二(北九州市立大学)	
事例-3	16:20~16:40	芸大生は一般教養体育で何を体験し学んだか: バレーボール授業後の「振り返り・感想シート」の記述内容の考察から
	○岸本栄嗣(京都芸術大学)	
事例-4	16:40~17:00	大学での体育スポーツ授業における遠隔と対面授業の効果と役割: 必修科目としての体育スポーツ授業に着目して
	○吉原さちえ(東海大学)	

## 一般発表抄録（研究報告・事例報告）

2月28日（水）13：30～17：00

3セッション9演題（研究報告5演題，事例報告4演題）

<b>第1セッション3演題（13:30～14:30）</b>
<研究報告 1-3>
座長：東恩納 玲代（周南公立大学）
<b>第2セッション3演題（14:45～15:45）</b>
<研究報告 4-5・事例報告 1>
座長：榎本 翔太（岡山大学）
<b>第3セッション3演題（16:00～17:00）</b>
<事例報告 2-4>
座長：前川 真姫（環太平洋大学）

研究報告 1\_13:30-13:50

## 大学体育の AL 型授業による効果に関する一考察：

剣道に着目して

高瀬武志

桐蔭横浜大学 現代教養学環/慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科

キーワード：学びの効果, 非認知能力, 成長の実感

【背景と目的】大学における授業のあり方も,高等教育の大衆化に対応して,「教える」から「学ぶ」へのパラダイム転換が図られている。そこで,大学体育にもアクティブラーニング型 (AL 型) 授業を取り入れた結果,学習者は体育実技における習得すべき課題である技術以外に何を学び,どのような点に自身の成長を感じ取っているのかを明らかにすることが本研究における目的である。【方法】授業で使用するテキスト兼ノートを学習ポートフォリオのように活用し,授業内での学びや気づきを毎回,記述し保存する。最後の授業回で自身の学習の積み重ねを振り返り,どのような学びや気づきと成長を得ることができたかを省察し,レポートにまとめる。学習者のレポートにある記述から,学習者が AL 型授業で技術以外に何を学び,どのような成長を感得する効果があったかを検証する。【結果と考察】学習者のレポートから読み取れるものとして,大学体育の実技授業における技術の習得以外に AL 型授業を通して,自身の学習に対する目的意識の設定,他者とのコミュニケーション能力の向上,感情のコントロール,思考の言語化,日本文化の理解による日本人としてのアイデンティティの確立といった事柄を得ていることが明らかとなった。また,ほぼ全ての学習者が 13 回の授業を通して自身の人間的成長を感じていることがわかった。【結論】大学体育の AL 型授業として技術の習得 (理解と実践を含む) を目指す際に学習者個人で取り組む「個の学習」では,自身の学習に対する目的意識の設定や心身の操作性について学びを得ており,他者と交わりグループで取り組む「協同学習」を行うことで,コミュニケーション能力の向上や自身の感情のコントロール,思考の言語化と伝え方について学びを得ており,技術の習得以外に非認知能力の獲得や向上,それに関わる能力の向上に効果があることに加え,学習者が成長の実感を得ていることがわかった。

研究報告 2\_13:50-14:10

## STEAMS 教育としての大学体育の提案：

融合的な学びの捉え方から生まれる大学体育の新展開

北村勝朗

日本大学

キーワード：大学体育教育の意義, 身体性を基軸とした学び, デザイン思考, 質的分析

【背景と目的】AI や IoT 等の急速な技術の進展により,変化が激しく予測不可能な今日社会において,様々な情報を活用しながらそれを統合し,課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成が求められている。そうした中,文部科学省等は,理数系の教育推進を目指した STEM (Science, Technology, Engineering, Mathematics) に加え,芸術,文化,生活,経済,倫理等を含めた広い範囲で A (Art) を定義づけ,各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていくための科目横断的な STEAM 教育を推進している。本研究の目的は,こうした STEAM 教育という新たな側面から大学体育における身体を通した学びの意義を掘り起こし, S (Sports) を加えた STEAMS 教育を提案し,大学教育の新たな可能性を示すことにある。【方法】20XX 年に関東地方の理工系大学で教養教育科目の体育実技の授業 (週 1 回対面形式,選択科目) を履修した 1 年次学生で調査協力の承諾が得られた 82 名を対象とした。授業前後に,大学での専門分野の学びと大学体育の学びのイメージに関しインタビュー調査を実施した。データ分析は質的データ分析法に基づいて行った。【結果と考察】分析の結果,本研究の対象となった理工系大学生のもつ大学体育の学び観は,【多様な知る体験】【探索体験】【魅力体験】の 3 つのカテゴリーから構成される点が見いだされた。そこから,大学体育における身体性を基軸とした独自性,および身体の気づきを通した関係性が STEAMS 教育モデルの中で示された。【結論】大学における創造的人材の育成という点で,多様性に富んだ学びの場の設定と,問い深める機会の保証,そして創造に魅了される体験を蓄積する STEAMS 教育の在り方を問うことが重要である点が示唆された。

研究報告 3\_14:10-14:30

## 大学体育授業時間外の日常身体活動促進の実態： 文献調査および質問票調査から

松浦稜<sup>1</sup>, 木内敦詞<sup>2</sup>, 加畑碧<sup>1</sup>

<sup>1</sup>筑波大学大学院人間総合科学学術院, <sup>2</sup>筑波大学体育系

キーワード：大学生 大学体育授業 日常生活 身体活動促進 スコーピング・レビュー

【背景と目的】体育科目は、授業内の身体活動だけでなく、授業時間外の日常生活における身体活動を促す役割も期待されているが、その実態は明らかではない。本研究の目的は、大学体育授業を通じた授業時間外の日常生活の身体活動促進に関する取り組み実態を、先行研究に基づく文献調査および教員と学生対象の質問票調査から明らかにすることであった。【方法】文献調査は、スコーピング・レビューのための報告ガイドラインに基づいて実施された。日本の大学体育授業で日常生活の身体活動促進のための取り組みを行ない、授業時間外の身体活動量を測定している研究を、CiNiiとJ-STAGE上で「身体活動 OR 運動 AND 体育 AND 日常生活 AND 大学生」をキーワードに検索した。質問票調査は、首都圏のA大学とB大学で教養体育を担当している教員13名と受講学生284名を対象に実施された。【結果と考察】大学体育授業を通じた日常生活の身体活動促進に関する以下の課題が明らかになった。1) 本研究の調査対象となった論文は11編であり、その学術的な報告が極めて少ないこと、2) その中で日常生活の身体活動を促進する取り組みすべてが「知識ベース」で、身体活動促進のための具体的な運動を実践する「実技ベース」の取り組みがないこと、3) 大学体育授業で日常生活の身体活動促進のための取り組みがあると回答した教員は69%に対し、学生は28%であり、学生と教員の認識に大きな差異があること。【結論】今後は、活動的な日常生活に直接繋がるような実践的な運動教材を授業内で扱うとともに、その実践内容や学修成果に関する学術的な情報の集積が望まれる。

研究報告 4\_14:45-15:05

## 学生アスリートにおけるライフスキルの価値： 大学柔道部員を対象とした一般性自己効力感への影響性の検討

藤島将太, 西田順一

近畿大学大学院商学研究科

キーワード：心理社会的能力, 柔道競技者, アスリートの問題行動解決, 個人的スキル

【問題と目的】近年、学生アスリートにおける不祥事が相次いでいる。問題行動との関連要因の一つとして一般性自己効力感が注目され（福良・中地, 2022）、諸問題の予防の鍵となる。一般性自己効力感は成功経験やモデリング等により高められることが知られる。これらに加え、スポーツ経験により培われるライフスキルの一般性自己効力感への影響性が明らかとなれば、ライフスキルの価値をさらに確認できる。本研究では大学柔道部員を対象に一般性自己効力感へのライフスキルの影響性を明らかにすることを目的とした。【方法】対象者は大学柔道部員42名及び一般学生36名であった。ライフスキルの測定は、「日常生活スキル尺度（島本・石井, 2006）」（「個人的スキル」「対人スキル」、8因子24項目）、一般性自己効力感の測定は、「一般性セルフ・エフィカシー尺度（坂野・東條, 1986）」（3因子16項目）を用いた。2023年7月にGoogle Formsより調査した。【結果】大学柔道部員のライフスキル得点及び一般性自己効力感得点は基準値に比べ有意に高かった。また、一般性自己効力感へのライフスキルの影響性は、「行動の積極性」においては「リーダーシップ」、「失敗に対する不安」においては「自尊心」、「能力の社会的位置づけ」においては「前向きな思考」と、それぞれ有意な影響性が見られた。【考察】「リーダーシップ」、「自尊心」、「前向きな思考」が一般性自己効力感に影響を及ぼし、これらは「個人的スキル」が大部分を占めた。「個人的スキル」は、個人競技特性を反映した心理社会的能力であり、柔道においては、個人的な能力を高める場面が多数存在し、それらが一般性自己効力感に影響していると考えられる。【結論】大学柔道部員におけるライフスキルは一般性自己効力感に影響を及ぼすことが明らかとなり、学生アスリートのライフスキルの価値を再確認するに至った。

研究報告 5\_15:05-15:25

## 異なる種目の一過性運動による心理的効果： 大学体育授業におけるヨガとエアロビックダンスの比較

渡辺久美<sup>1</sup>, 中村好男<sup>2</sup>

<sup>1</sup>桜美林大学芸術文化学群, <sup>2</sup>早稲田大学スポーツ科学研究科

キーワード：大学生, 異なる運動, 運動効果, 気分状態

【背景と目的】運動習慣が少なくなる大学生にとって, 大学の体育授業は肯定的な感情をもたらすことが多く報告されている. しかしながら, 大学体育授業の一過性の運動効果として, 異なる運動種目を比較検討した報告は少なく検討する余地があると考えた. そこで本研究の目的は, ヨガとエアロビックダンスを実施した際の一過性運動による心理的効果を明らかにし, 両種目を比較検討することであった. 【方法】対象者は同意を得た大学1年生~3年生18名(男性3名, 女性15名)であった. ヨガとエアロビックダンスのそれぞれが授業日となっている日を選択し, 運動前後に二次元気分尺度 (Two-dimensional Mood Scale-Short Term: TDMS-ST) を用いて測定した. また, 運動前後の心身の状態を記述してもらった. 【結果と考察】TDMS-STの結果から, 気分状態の変化としてヨガでは落ち着きやリラックス感をもたらした. エアロビックダンスでは, 無気力やだらけたといった気分を改善し, イキイキと活気にあふれることが明らかとなった. また両者間における心理的効果を比較したところ「活性度」「覚醒度」に有意差を認め, 「安定度」「快適度」では有意差を認めなかった. 一方, 対象者の記述からは, 両種目ともに運動前は「だるい」「眠い」という発言がみられたが, 運動後は「スッキリした」という発言が多くみられた. また, 自身の生活を肯定的に捉える発言もみられた. これらの結果より, 体を動かすことで脳や肉体にはスッキリとした感覚が生じているため, 運動強度や種目が異なっても学生からすれば, いずれも快適な状態として感じていると考えられた. 【結論】ヨガとエアロビックダンスでは覚醒状態に差がみられたが, 共通して快適な状態になることが明らかになった. さらに毎週の体育は, 一過性の心理的効果だけではなく, 生活に対する気分を前向きにさせる可能性があること示唆された.

事例報告 1\_15:25-15:45

## 米国における大学体育・スポーツの取り組み事例：

大学体育発祥の地であるアマーフト大学とマサチューセッツ工科大学の現地調査

難波秀行<sup>1</sup>, 中田賢一<sup>2</sup>

<sup>1</sup>日本大学理工学部, <sup>2</sup>兵庫大学附属総合研究所

キーワード：体育科目, 競技スポーツ, アスレティックデパートメント, NCAA, 大学の価値

【背景と目的】わが国の高等教育機関は主に米国の大学をモデルとしており, 欧米の多くのスポーツは, 明治時代(1868~1912年)に米国を介して日本に伝えられた. 米国の大学における体育科目の教育的な意義, 全米大学体育協会(以下NCAA)を理解することは, わが国の大学体育・スポーツの発展のために重要な示唆を提供する. 考え, 大学体育発祥の地と最先端の理工系大学の実態調査を行った. 【方法】2023年8月6日から8月11日までアマーフト大学を訪問しアスレティックディレクターと面会し情報収集を行った. 2023年8月4日にMITのアスレティックセンターおよび体育施設を訪問した. 【結果と考察】アマーフト大学の体育・スポーツの位置づけについて「体育科目(16講座)」, 「競技スポーツ(28チーム)」, 「クラブスポーツ(14チーム)」の3つがあり, それらをサポートする複数の部門があった. 学生アスリートは, 全学生1,800人中550人も占めており, そのゴールには, ①学生がポジティブな経験を積むこと, ②尊敬, 友愛, 包摂(一体性)といった優れたチーム文化, ③コートやグラウンドでの成功体験, ④キャンパス全体が誇れる1つのチーム, 以上の4つが挙げられた. マサチューセッツ工科大学は, 大学の価値として「卓越した好奇心」, 「寛容さと尊重」, 「コミュニティへの所属」の3つを掲げており, 体育科目8単位(4科目)を履修する必要があり, 水泳は必修で, 自己生存のためのスキル獲得を目的として技能テストに合格する必要があった. 両大学ともNCAA\_DIIIに属しており, 競技スポーツにも力を入れていた. 【結論】全米でもトップクラスのリベラルアーツカレッジと理工系単科大学の2校の大学体育事情を調査し, 共通点として, 大学の教育方針に基づいて「体育科目」, 「競技スポーツ」, 「クラブ活動」が位置づいており, それぞれの大学において, 特徴あるカリキュラムが組まれていた.

事例報告 2\_16:00-16:20

## 大学体育授業におけるアダプテッドスポーツ実践事例研究： 実践からみえてくる限界と課題

山本浩二

北九州市立大学基盤教育センター

キーワード：障がい者スポーツ, 共生社会

【背景と目的】2016（平成28）年4月、障害者差別解消法が施行され「共生社会」の実現に向け、合理的配慮がいたるところで求められている。しかしながら、教育現場において障がい児・者と触れ合う機会はそう多くはないため、実践事例も少ない。配慮や工夫が必要だとわかっているにもかかわらず実際にどのように配慮し、どのような工夫をすればよいかかわからない。そこで、本研究ではアダプテッドスポーツ実践事例の紹介とその成果について言及し、そこからみえてくる課題提示や実践理論の体系化を行うこととする。【方法】体育関連科目において、実際に障がいのある学生が受講する機会が多く、そのたびにアダプテッドスポーツ種目を導入することで、全員が行うことができるスポーツ種目を実施した。受講生にはガイダンスで説明し、授業の最後にアンケート調査を実施し、主に障がい者とともにスポーツを行うことやアダプテッドスポーツの種目について尋ねている。【結果と考察】前任校においては、重度障がい者が一般体育授業を受講し、本学体育関連科目においても、いわゆる実技科目「フィジカル・エクササイズ」（1単位）と、生涯スポーツを意図した実技と講義をミックスした演習科目「フィジカル・ヘルス」（2単位）において、それぞれ身体障がいのある学生が受講した。受講者からは、共生社会に向け前向きな感想が得られた。しかしながら、障がい者が受講する授業と受講していない授業（健常者のみ）では種目工夫を行うことで運動量の差が顕著であった。すなわち、障がい者に合わせた種目の工夫は、健常者にとって運動量の少ないものとなり、特に体力面の教育（向上）が担保できないと考えられる。【結論】これまで障がい者とともに行う体育授業を実施してきたが、多くの利点も確認しつつも、できる種目や運動量確保の限界にも直面した。新たな種目の開発と授業科目の制度工夫も必要であろう。

事例報告 3\_16:20-16:40

## 芸大生は一般教養体育で何を体験し学んだか： バレーボール授業後の「振り返り・感想シート」の記述内容の考察から

岸本栄嗣

京都芸術大学芸術教養センター

キーワード：体育実技, 三段攻撃, 体験

【背景と目的】京都芸術大学の「体育実技I」は、「体力向上とスポーツを通してのコミュニケーション作り」をテーマとして開講されている。ただ芸大ゆえか、「運動が嫌い」、「コミュニケーションは苦手」と訴える学生は珍しくない。大学教養体育に相応しい内容を伴いつつ、「体育実技」が学生にとって上記テーマに適った体験や学びとなるには、各競技で具体的に何をとり上げるべきか非常悩む。こうした中、筆者は第14回大学体育指導者養成研修会（2023年3月/千葉工業大学）において、田中博史氏（大東文化大学教授）指導の「バレーボール」を受講した。その中で「よりハイレベルなバレーボールのゲーム展開」を目指す授業として、「三段攻撃」の学習を重視した指導について学んだ。「コミュニケーション能力の向上」も目標のひとつとされていた。そこで、研修を参考にし、筆者担当クラスで「三段攻撃」を学習の軸に据えたバレーボール授業を試みた。本発表では、2023年度前期のバレーボールの授業での学生の体験や学びを整理・考察して報告する。【方法】2023年度「体育実技I」（筆者担当クラス）の受講生が提出した「振り返り・感想シート」のうち、バレーボール実施回分と最終回分を質的データとして扱い、分析・考察の対象とした。【結果と考察】「振り返り・感想シート」では、自他の技術的向上に対する喜びを語る記述や、チームワークやチームメイトとのやりとりに関するエピソードをポジティブに語る記述が比較的豊かであった。「三段攻撃」への取り組みは、受講生にとって「ハイレベル」な学びと、コミュニケーション面でのポジティブな体験が同時に実感されていると考えられた。

事例報告 4\_16:40-17:00

## 大学での体育スポーツ授業における遠隔と対面授業の効果と役割： 必修科目としての体育スポーツ授業に着目して

吉原さちえ

東海大学スポーツプロモーションセンター

キーワード：大学, 体育スポーツ授業, ライフスタイル

【背景と目的】インクルーシブな視点を取り入れた体育スポーツ授業は「授業を通じてスポーツの印象や捉え方がこれまでと異なり、スポーツの広がりを感じている」と第11回大学体育スポーツ研究フォーラムで事例発表をした。しかしこの事例は生涯を通じたスポーツライフスタイルの獲得に重点を置いた身体活動を伴うインクルーシブな授業を通して見出されているにすぎない。第3期「スポーツ基本計画」では新たな視点が3つ加わり、個人と社会に対してスポーツがもたらす影響を幅広く捉えられている。そこで本研究では、東海大学が全1年次生を対象とした全14回（遠隔授業7回と対面授業8回）の授業展開の中で、学生たちが「スポーツの広がり」をどのように積み重ねているのか、大学の体育スポーツ授業が果たすべき役割と効果について明らかにすることを目的とした。【方法】「生涯スポーツ理論実習」の遠隔授業と面接授業に取り組む文系理系各1クラスに着目し、生涯におけるスポーツライフの獲得に繋がる要素を紐解くこととした。【結果】1) スポーツ活動の経験の有無に関わらず、スポーツ種目を調べ、歴史やルールを学び、新たなスポーツ実践することより、多岐にわたるスポーツ活動を認識している。2) 自らのライフスタイルの中にどのようなスポーツを取り入れるべきか、考えるきっかけとなっている。【考察】遠隔と面接授業を実施することで、体育の好き嫌いに関わらず、誰もが体育スポーツの新たな魅力に気づき、今後のライフスタイルの中に取り入れ方に対して前向きに捉えることができているのではないか。【結論】大学で体育スポーツの授業を展開することは、生涯にわたるスポーツライフの獲得につながり、スポーツ活動の実践とともに自ら調べ学習を行うことで、スポーツに対する理解が深まり、関り方が継続されることが期待できる。

## 「大学体育スポーツ学研究」投稿規定

- 1. 本誌の名称：** 本誌の名称を、「大学体育スポーツ学研究（Japanese Journal of Physical Education and Sport for Higher Education）」とする。本誌は、公益社団法人<sup>\*</sup> <sup>1</sup>全国大学体育連合（以下「この法人」という）が2003年～2018年に刊行した「大学体育学」を引き継ぐものである。  
\*1：2011年12月までは社団法人全国大学体育連合。
- 2. 本誌の目的：** 本誌は、高等教育機関で行われる体育およびスポーツ（以下「大学体育スポーツ」という）における教育活動の発展を目的に、この法人が発行する学術雑誌である。競技力向上に関する基礎科学的な研究は、本誌の範疇に含まれない。
- 3. 投稿資格：** 本誌には、この法人の会員と非会員を問わず、論文を投稿することができる。ただし、投稿料および掲載料については、19項に定めるとおりとする。本誌編集委員会（以下「本委員会」という）は、論文投稿を依頼することができる。
- 4. 投稿可能な原稿：** 投稿論文は完結した未発表のものであり、他誌へ投稿中でないものに限る。ただし、学会発表抄録や科研費等の研究報告書の内容を充実させた論文、各種研究助成金の交付を受けた研究をまとめた論文、発表済みの結果であっても新たな観点から再考察した論文は、投稿することができる。
- 5. 投稿論文の種類：** 表1のとおりとする。

表1 投稿論文の種類、内容、制限頁数

論文の種類	内容	制限頁数 <sup>*2</sup>
総説 Review	大学体育スポーツに関する特定の内容や主題について、関連文献や資料に基づいて総括的に論評した論文	12頁
原著 Original Research	大学体育スポーツの発展に寄与しうる研究論文で、高い独創性と学術性を備えたもの	10頁
研究ノート Research Note	原著に求められる独創性と学術性の水準に満たないもの、大学体育スポーツの発展に寄与しうる知見や取組等をまとめた報告や資料	8頁
フォーラム報告 Forum Report	大学体育スポーツ研究フォーラムで発表した内容（一般発表、ラウンドテーブル、ワークショップ、特別講演など）の抄録	1頁
その他 Miscellaneous	編集委員会からの依頼原稿や、他国の言語で掲載された論文の二次出版論文など	特に定めない

<sup>\*2</sup>：図表等を含めた刷り上がり頁数（文字のみの場合の1頁は約2,300字）

- 6. 原稿の書式：** 原稿は、図表も含めて1つのWordファイルにまとめたものとそのPDFファイルの両方で提出することとする。書式はA4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mm、フォントは明朝体10.5ポイント、英数字はすべて半角とする。表紙、抄録、本文までの通し頁番号を各頁のフッター中央部に、各頁にも1から始まる行番号を左余白に、それぞれ付すものとする。
- 7. 原稿の使用言語：** 投稿原稿における使用言語は、日本語または英語とする。
- 8. 原稿の構成：** 表2のとおりとする。
- 9. 抄録：** 和文論文には英文抄録を、英文論文には日本語抄録をつける。抄録はネイティブ・スピーカーのチェックを受けたものとする。

表2 投稿原稿の構成と順序

項目	内容
表紙	表題 簡潔かつ明瞭なもの。副題をつける場合はコロン（:）で続ける（和英両方）
	ランニングタイトル 25字以内
	論文の種類 表1から適切なものを選択
	図表の数 図と表それぞれの数を記載
	文字数 本文、文献、注の合計文字数
抄録とキーワード	200-300語の英文抄録（改行なし）と500-700字の和訳文、和英3-5語のキーワード 英文抄録は受理が決定した後に提出することも可
本文	（「原著 Original Research」は以下の構成で、他の種類の原稿はこれに準じた形式で、それぞれ執筆する）
	緒言 先行研究との関連から、研究の目的と必要性を述べる。「問題と目的」「はじめに」なども可
	方法 研究の妥当性・信頼性の評価ができるように、研究方法を具体的に述べる
	結果 目的と方法に沿って得られた結果を要約し、考察や結論の論拠を示す
	考察 結果の評価と解釈を述べる
	結論 省略可、「まとめ」「要約」なども可
注	必要な場合は記載する
付記、謝辞	論文受理後に追記する
文献	「10. 文献リスト」に従い、著者名のアルファベット順に一括する
図表	フォントは明朝体とする。本文頁の右横の空白に、図表等の挿入箇所を指示する 表の罫線は必要な横罫線だけに留め、縦罫線は使用しない。縦罫線のかわりに十分な空白を置く

- 10. 文献リストおよび本文中での文献記載：** 文献リストは、著者名のアルファベット順に並べ、本文の後に一括する。雑誌名は和洋ともに略記しない。文献リストおよび本文中の文献記載方法は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会発行の「体育学研究」投稿の手引き（最新版）を参照する。
- 11. 研究参加者の取り扱い：** 人を対象とする研究遂行に際して、研究対象者の人権尊重や社会的影響等について配慮した点を論文中に明記する。研究倫理については、一般社団法人日本体育学会研究倫理綱領（最新版）を参照する。
- 12. 投稿原稿返却の例：** 以上2～11に従わない原稿（本誌の目的に沿わないもの、書式に著しい不備あるもの）や水準の著しく低い原稿については、本委員会の判断により、審査を行わない場合がある。
- 13. 投稿原稿の提出方法：** 原稿は、この法人の事務局（info@daitairen.or.jp）宛てに、件名を【大学体育スポーツ学研究への投稿論文】としたEメールの添付書類として投稿する。その際、以下8項目【（1）著者名（和英、著者全員）、（2）所属機関名（和英、著者全員）、（3）代表著者の氏名・電話番号・e-mail アドレス、（4）表題、（5）ランニングタイトル、（6）論文の種類、（7）和文抄録、（8）和文キーワード】をEメール本文として同時に送信する。また、本連合ホームページに掲載されている「投稿時チェックリスト」へ必要事項を記入のうえ、添付書類とあわせて提出する。
- 14. 論文投稿の締切日：** 論文投稿は随時受け付ける。投稿後、審査を経て論文掲載可（受理）となるまでは、通常、最低3ヶ月を要する。
- 15. 再提出の期限：** 本委員会より訂正を求められた投稿原稿の再提出期限は、訂正通知日から原則28日以内とする。また、再々提出期限は、訂正通知日から原則14日以内とする。なお、特別な事情なくして提出の期限を1ヶ月以上超えた場合は新規投稿原稿として審査を行う。

16. **投稿論文の採否：** 本誌編集委員会（以下「本委員会」という）が投稿論文の採否，加除訂正の要求，校正（著者校正は最大2回）などを行い，著者へ連絡する．投稿論文は，査読意見に基づき掲載の採否を決定する．査読の制限回数を原則3回までとする．
17. **論文受理証明書の発行：** 本委員会により掲載承認された受理論文については，著者の希望により論文受理証明書の発行を行う．
18. **論文公刊の時期：** 原則として1月末までに掲載承認された受理論文は，同年3月にこの法人のホームページおよびJ-STAGE上でPDFファイルとして公開される．なお，論文掲載可となった論文原稿は，版組完了後，本連合ホームページ等に早期公開論文として掲載される．
19. **投稿料および掲載料：** 著者全員がこの法人の会員の場合は，投稿料・掲載料ともに無料とする．著者に非会員が含まれる場合は論文1編につき1万円の投稿料を，掲載料については刷り上がり1頁あたり3千円を，投稿者が負担する．表1に示す制限頁数超過の場合は，会員・非会員を問わず，1頁につき3千円を投稿者が負担する．なお，本誌では，会員校の大学院生を会員と同様の扱いとする．
20. **論文の著作権：** 本誌に掲載された論文の著作権の一切（著作権法第27条及び第28条の権利を含む）は，この法人に帰属または譲渡されるものとする．ただし，論文の内容に関する責任は当該論文の著者が負う．
21. **各大学等の機関リポジトリコンテンツ登録に係る著作権：** 本誌掲載論文を著者の所属する大学等の機関リポジトリへ登録するために，本誌では著作権のうち複製権および公衆送信権の行使を各機関（の附属図書館）に対して認める．
22. **本規定の改廃：** 常務理事会にて行う．

#### 附則

- 本規定は，平成15年6月14日より適用する．  
本規定は，平成18年4月1日より適用する．  
本規定は，平成20年9月19日より適用する．  
本規定は，平成24年2月6日より適用する．  
本規定は，平成25年7月26日より適用する．  
本規定は，平成27年5月29日より適用する．  
本規定は，平成29年2月21日より適用する．  
本規定は，平成30年5月18日より適用する．  
本規定は，平成31年2月7日より適用する．  
本規定は，令和3年2月9日より適用する．  
本規定は，令和4年2月10日より適用する．

## 「大学体育スポーツ学研究」投稿時チェックリスト

(2020年4月1日策定, 2021年3月31日改訂, 2022年2月10日改訂, 2023年3月10日改訂)

### < 投稿にあたって >

- 投稿論文は、高等教育機関での体育およびスポーツにおける教育活動の発展を目的とした内容であり、競技力向上に関する基礎科学的な研究には該当しない。
- 投稿時点で、著者全員が公益社団法人全国大学体育連合（以下、この法人）の会員である。
  - 非会員が含まれる場合、投稿論文1編につき1万円の投稿料を納入した。  
納入方法は、この法人事務局（info@daitairen.or.jp）に問い合わせください。  
すでに会員であるにも関わらず投稿料を誤って入金した場合や、投稿料不要の会員校大学院生が投稿料を誤って入金した場合、返金いたしませんのでご注意ください。
- 投稿論文は完結した未発表の内容で、本誌や他誌に掲載済や印刷中もしくは他誌へ投稿中ではない。
- 原稿提出にあたり、図表も含めたWordファイルとそのPDFファイルの両方を準備した。
- Eメールによる原稿提出方法（件名、著者名等の8項目、宛先）を確認した。
- 和文論文には英文抄録をつけ、ネイティブ・スピーカーから校正を受けた（受理決定後の提出も可）。
- 投稿者名や所属先等が判明しないよう、イニシャル等（記載例：A大学の倫理）でブラインドした。

「表紙」は、以下のとおり記載した。

- 25字以内のランニングタイトル
- 論文の種類（投稿規定を確認し、適切な論文種類、内容、制限頁数とした）
- 図と表それぞれの数および本文、文献、注の合計文字数
- 200～300語の英文抄録（改行なし）と500～700字の和訳文（英文抄録は受理が決定した後に提出することも可）
- 和英3～5語のキーワード（表題と重複しない語とした）

「本文」は、以下のとおり記載した。

- A4版縦置き・横書きで全角40字×30行、余白は上下左右35mmとした。
- フォントは明朝体10.5ポイント、英数字は半角とした。
- 図表は明朝体で作成し、本文頁の右側余白に図表等の挿入箇所を指示した。
- 表の罫線は必要な横罫線だけに留め、縦罫線は使用せずに作成した。
- 図表（タイトル中央配置）は直ちに印刷できるよう、適度な大きさと鮮明に作成した。
- 研究対象者の人権尊重や社会的影響等について配慮した点を投稿論文中に明記した。
- 投稿規定に従って、文献リスト（著者名のアルファベット順；雑誌名は略記しない等）と本文中の文献を記載した。8名以上の著者の場合には、第1～6著者…最終著者と記載した。
- 句読点は「，」と「．」にした。
- 統計的概念の記号（M, SD, n, t等）はイタリック体にした。
- 各頁には、1から始まる行番号を左余白に記載した。

### < その他 >

- 表紙～本文までの通し頁番号を各頁のフッター中央部に記載した。
- 掲載承認された場合、この法人のHPに早期公開となることを承認した。

上記の点および投稿規定をすべて確認し、投稿原稿を作成しました。

西暦 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

氏名： \_\_\_\_\_

第12回大学体育スポーツ研究フォーラム  
発表プログラム・抄録集

---

2024（令和6）年2月26日発行

発行：公益社団法人全国大学体育連合（JAUPES）

運営委員長 田原亮二

運営副委員長 中山正剛

編集：

委員 藤野和樹

委員 梶田和宏

---

Printed in Japan